



町が誇る梅干し名人
大久保定一さん(前列)
頼もしい後継者である
孫の由圭里さん(後列右)、
移住者である。
NPO法人里山みらいの
小田奈生子さん(同中央)、
永野裕介さん(同左)。

特集
生活者から見る
「スマート」
その2

働き方の新たな可能性

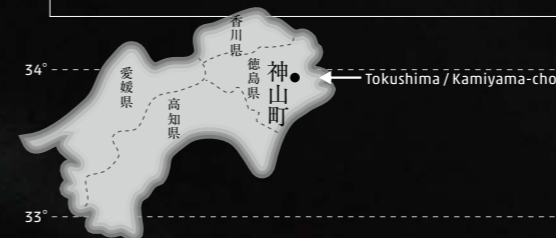
これまで地元民だけに
知られる存在だった
昔ながらの神山の梅干し。
ふっくらと艶やかな
梅干しは、移住者により
「神山ルビイ」と命名され、
町の特産品として
販売されている。

働き手が減り、過疎にあえぐ市町村は増加の一途をたどっている。しかし、一方で、多様な投資はせずとも、高速のインターネット回線等のICT(情報通信技術)インフラと独自の創造力を活かすことで、変貌を遂げつつある地域もある。都市圏に拠点を置く企業がサテライトオフィスを次々に開設し、多彩な職能を持つ人々が移住してきているという徳島県神山町を訪ね、地方での新しい働き方を探った。

取材・執筆/加藤じのぶ 撮影/名取和久

徳島県

神山町



Special
Feature

Make
Our Life
"Smart"



Part
2

ICTが町に「異変」を起こした

徳島市内から車で約50分、急峻な山々の間を流れる鮎喰川上中流域に沿って広がる神山町。町が誕生した1955年の2万1000人をピークに人口は減少し、現在の人口は約5900人弱、高齢化率は46%に達し、典型的な少子高齢化が進む町だ。

その神山町が脚光を浴びるようになったのは、2つの「異変」に端を発する。2010年以降、都市圏に本社があるICTベンチャー企業がサテライトオフィスを続々開設したこと、11年に町史上初めて転入者数が転出者数を上回ったことだ。この異変は、過疎にあえぐ他の市町村を睥睨させた。以来、自治体からの視察等が引きもきらない状態が続いている。

この立役者となったのは、2004年に設立されたNPO法人グリーンパレーだ。理事長の大南信也さんは、神山町出身。「できない」ではなく、「どうすればできるか」を考える。そして「とにかく始める」、「Just Do It!」をモットーに、生まれ育った町を、多様な人材が集まるコミュニティにする取り組みに携わってきた。

都市部に本社がある企業に働きかけ事業所を誘致する「サテライトオフィス」、カフェやウェブ制作会社など、将来町が必要とする技術を持った働き



町全体のプロデューサーと慕われる、NPO法人グリーンパレー理事長の大南信也さん。

手や企業を逆指名して移住を受け入れる「ワーク・イン・レジデンス」、厚生労働省の認定を受けた職業訓練や、起業支援など町の後継人材を育成する「神山塾」などは、その主な例だ。

これらの背景には、「創造的過疎による持続可能な地域づくり」という考えがある。人口減少は受け入れながらも、外部から若者やクリエイティブな人材を誘致することでコミュニティの健全化を図っていく、というのだ。

そのためには、移住者の多様な働き方を可能にするための場としての価値を高めなければならない。これを実現可能にしたのは、神山町全域に整備された超高速ブロードバンド網など、ICTインフラの充実だ。都心に匹敵するICT利用環境が、企業や働き手の心を捉え、場所にこだわらない働き方の実現を可能にしたのである。

もちろん、それだけで今の神山町があるわけではない。1999年に始めた国内外のアーティストと地元民が交流しながら創作する「神山アーティスト・イン・レジデンス(KAIR)」、空き店舗を改修し移住者に貸す「空家



縫製工場をワーキングスペースとして蘇らせた「神山パレー」サテライトオフィス・コンプレックス。地方発の新しいビジネスコミュニティの拠点だ。

町屋」プロジェクトなど、「できることを、とにかくやる」という精神で立ち上げてきた活動と、ICTインフラの充実などがかみ合った結果である。グリーンパレーの設立から10年余、この町での働き方は、どのように変わってきたのだろうか。

「コストを遥かに超える成果」サテライトオフィス

元縫製工場を改修して誕生した「神山パレー・サテライトオフィス・コンプレックス」は、グリーンパレーが管理するワーキングスペース(*)だ。ガラスで仕切られた専用スペースと多目的に使える広い共有スペースは個人・法人を問わず利用できる。

ここにオフィスを構える(株)ダンクソフトは、ワーク・イン・レジデンスをきっかけに、神山町にサテライトオフィスを設けた企業のひとつだ。インターネットサイトのコンサルティングや制作・構築などを手掛ける。

モニターの前に立つのは本橋大輔さん。埼玉県出身の本橋さんは、徳島市内のIT系企業で10年程働いた後、神山サテライトオフィスの開設に動いたダンクソフトの徳島オフィスへ転職。徳島市内と神山町を往復しているうちに、自然の豊かな神山に惹かれ移住した。

仕事場としての環境は文句なしだ。勤務時間はフレックスクス制。東京本社との打ち合わせはウェブ会議で滞りなく進められる。業務の要となる高速ブロードバンドの速度は、通信量が多くないため、東京より速いくらいだ。スペースも広く自由に使えるし、渋滞が全くないので通勤時にストレスを感じることもない。暮らしの面でも大きな不満はない。しいて言えば「歩いて行ける距離にコンビニがないことくらい」だが、それもインターネット通販でまかなえる。休日には趣味の自転車で町じゅうを走るのが楽しい。日々の充実度は、神山にいる方が高いという。

神山オフィス開設以前より伊豆高原にサテライトオフィスを設置するなど、ICTのもつ力を駆使して、時間と場所に拘束されない働き方をダンクソフトは進めている。一般に、サテライト

オフィスには否定的な見方もあるが、同社は「Tokushima Working styles」のHP内で、「サテライトオフィスを開設して感じたデメリットは？」の問いに次のように答えている。「事業の側面から見れば、東京と徳島を往復するスタイルのサテライトオフィス運営はコストがかかる事は事実です。ただ社員の人的な成長を企業の付加価値に変える企業文化や、東京以外でも事業を継続できる仕組みを作る価値はそのコストを遥かに超える成果があると感じています」



上／神山町を流れる鮎喰川。四国の自然百選にも選ばれている。中／今夏オープンした、WEEK神山。いつもの仕事を、ちがう場所でをコンセプトに、短期滞在しながら働き方や暮らし方を見直すことができる宿泊施設だ。下／神山町内に残る棚田の風景。



上／サテライトオフィスコンプレックス内で働くダンクソフト本橋大輔さん。自然の豊かな神山に惹かれ移住した。

右／開放感のあるオフィスでの作業はリラックスモードが漂う。結婚を控え、神山町で新居探しをしているという。

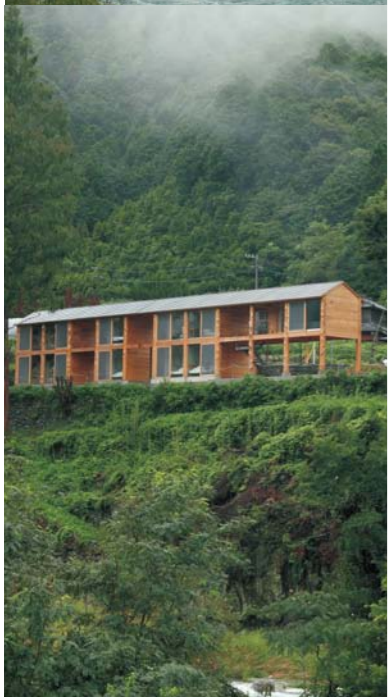
本橋さんの話には、そのような「成果」が現実のものであることがうかがえる。

移住者と地元民の幸福な連携

行政とグリーンパレーのようなNPOが、役割分担をしながら活動を進めているのも神山町の特徴だ。行政はNPOの活動をサポートするが、個々の活動やアイデアに干渉することはない。都会からの移住者が地域力の維持・強化に協力する「地域おこし協力隊」の隊員で構成されているNPO法人里山みらいについても、行政は「地域おこし協力隊」の募集は行ったが、実際の活動については一任している。

里山みらいは、地域に残る里山を受け継ぎつつ、新たな「みんなの里山」づくりを目指し、梅干しやすだちなど、

(*)互いに独立した個人や、小規模事業者がスペースを共有しながら、また時には協働しながら活動する共同の仕事場。



神山が誇る特産品の情報発信と販売に力を入れている。主力商品は、町内の複数の梅農家の梅干し5種を食べ比べできるセットなどだ。

「それぞれ味が全然違うんですよ」と言うのは、地域おこし協力隊に参加し、里山みらいの一員となった永野裕介さんと小田奈生子さん。ふたりとも初めて口にした時は、その素材ながら力強い味に衝撃を受けたそう。県内でも有数の梅の産地である神山町の梅干しは、木成りのまま完熟させた梅を塩と紫蘇のみで漬けるシンプルな製法を守っている。これまで地元のスーパーに出回るだけだったこの梅干しを、全国の人にも知ってもらいたい——パッケージデザインにも力を入れた利き梅干しセットは、インターネットによる積極的な情報発信を行い、大阪のデパートフェア等に出店、好評を博した。

なかでも人気なのは、神山町で梅干しづくりを続けて50年余という大久保定一さんが作る大粒の梅干し。懐かしい味に感激した都会の客から、大久保さんに手紙が届くこともあるという。見知らぬ人から反応をもらうのは、大久保さんにとって初めての経験だ。「50年やっていて、今が一番嬉しい。これも里山みらいさんのおかげ」と顔をほころばせる。数年前から孫の由圭里さんが仕事を手伝ってくれ、梅干しづくりの継承にも光がさしてきた。地元民にとって何の変哲もなかった神山



の梅干しに価値を見だし、インターネットを駆使しながら都会と里山の新しいつながりをもたらした移住者たちによる活動は、地場産業の新しい担い手の増加にもつながっていきそう。

ちなみに地域おこし協力隊の活動任期は3年だ。先述の永野さんと小田さんは、その後はどうするのだろうか。千葉市でオーガニックカフェなどのプロデュースをしていたが、子どもの誕生を機に神山町へイターン、隊員となった永野さんは、もうすぐ3年を迎える。「ここでの暮らしは、いいことだらけです」と言い切るほど、神山の町に満足している。任期後も、これまでの経験を生かし神山町でやれる仕事をしていこう、と考えている。

芸術大学を卒業後、様々な職種を経てメンバーとなった小田さんの任期は残り1年余。日本や海外各地を旅した小田さんが神山町を選んだのは、四国八十八ヶ所の第12番札所焼山寺があり、お遍路さんをあたたかく迎える「おもてなし文化」のある土地柄であることや、KAIIRなどアートの取り組みが盛んなことだったという。任期後をど

上／5種類の梅干しが味わえる「神山ルビイリキ梅干しセット」。
左／里山みらいオフィスにて。生産量日本一を誇るすだちを使った商品なども開発中だ。



うするかは模索中だが、神山町で仕事を見つけ、暮らすことができればいいと思っっている。

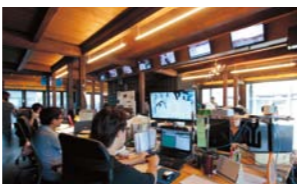
与えられるのではなく、自分たちで見つける——「創造的過疎の町」に根づこうとする移住者たちは、働くことにも創造力を発揮し、地域の新しい発展を生み出しつつある。

地元で働き続けるという選択

神山町に魅力を見いだすのは移住者



や経歴が違う面白い人たちと出会えることだと、割石さんは語る。「東京は人が多いけれど、年収、家族構成など同じような人にしか会わないんです」。数ではない豊かさが、この町にはある。今後もし結婚して子どもができたら、いろいろな人と関われる神山で育てるのもいいかもしれない、とも言っている。



右／古民家改装の右／古民家改装の右／古民家改装の右

都会と田舎——人生のステージに沿って働く場を、企業が提供するならば、それに越したことはない。プラットオフィスにおいて、本社とサテライトオフィスの「どちらで働きたいか」の選択が可能であることは、都会にも関心を持つ若者を引き付

だけではない。地元民が我が町を仕事の間として捉え直すケースも生まれている。

建物の外周360度をぐるりと囲む縁側が印象的な、その名も「えんがわオフィス」は、東京で番組情報の運用・配信を行う㈱プラットオフィスのサテライトオフィスだ。パソコンやモニターがずらりと並んだオフィスでは、4K解像度の映像素材のアーカイブ等を行う子会社(㈱えんがわ)の社員を含めた約20人が働いている。

プラットオフィスでは、東日本大震災以前から、BCP(事業継続計画)を作る必要性を痛感しており、全国の候補地を見て回る中、当初予定になかった神山を訪れ、この地に決めた。県が誇るICTインフラの充実も理由のひとつだが、決め手になったのは、この町が気に入ったならどうぞ、という雰囲気「だったという」。

えんがわオフィスが注目されているのは、全社員のうち15人が徳島県出身、さらにそのなかの5人は神山町出身者であること——単純に仕事場を田舎に移したというだけでなく、過疎地の重要課題である「雇用」が生まれていることにある。

入社2年目、システムエンジニアとして働く西本尚人さんも神山町出身者のひとりだ。

高校まで地元で育ち、愛媛の大学へ

ける原動力にもなるだろう。

スマートが拓く、それぞれの地域での働き方

ICTインフラの導入は、今や全国に広がっている。ただし、ICTインフラだけで、何かが劇的に変わるといふことはない。神山町をみるとわかるように、あくまでも、それを使う人ありきである、ということだ。それぞれの地域には、それぞれの人の集まり方があり、スマートの考え方があろう。創造性を発揮しつつ、自分たちのやり方を見つけていくことが重要だ。

各地で地方創生について講演を重ねるグリーンバレーの大南さんは言う。「地域の価値は、そこに何かがあるかではなく、どんな人が集まるかです。どんな人を地域に呼ぶかを主眼にすれば、集まった人から、地域の財産が生まれてくる」。各地なりの「神山町」が生まれてくることを期待したい。

進んだ。大学在学中、神山町で「暮らすことはあっても、働くことはない」と思っていた。地元に戻ったとしても、仕事は徳島市内で見つけるしかない——しかし、就活の時期になって、地元「今」を知り、驚いた。たくさん若者が町を歩き、空き家が活気あるオフィスになっている。「すごい！」

ちなみに割石さん自身は東京生まれの東京育ち。サテライトオフィスの開設に伴って初めて東京以外の地に住むことになったそうである。ICTインフラが整っていることで、東京と比べて仕事上の不便はない。今は、渋滞のない車での出勤ができる神山町の方が快適だという。



右／古民家改装の右／古民家改装の右／古民家改装の右

ワークイン・レジデンスなどで移住してきた人と地元の人とが交流する場にもなっている「カフェオマア」。オーナー自身も東京からの移住者だ。神山町の豊かな自然と明るい土地柄に惹かれ、この地にカフェをオープンした。

